

『黄檗版大藏經』の募縁刊記再考

松 永 知 海

本稿は『黄檗版大藏經』にある刊記のなか、鉄眼募縁にかかわる刊記について、資料的価値と、その数を確定することにある。

一 『黄檗版大藏經』の刊記とは

鉄眼は『大藏經』を刊行するにあたり、資金源として大々的な募縁活動を展開している。

その活動を知る重要な資料となるのが刊記である。刊記とは、鉄眼が大藏經を刻するに当たって、どこかの国の誰からいくら喜捨を受けたかを記し、つぎに典籍名巻次、願文を載せ、さらに何年何月黄檗山宝蔵院識という順序で鉄眼の募縁活動に関する情報が満載されているものである。最初の刊記は寛文十一年（一六七一）一月で合せて六二件、最終年の刊記は天和元年（一六八一）で、一七件である。鉄眼は翌年3月に入寂しているから更に入蔵予定典籍は有ったと考えられる。金額は白金一千両を喜捨した摂津の妙宇尼¹⁾から、二十二人が合せて六錢三分五釐を喜捨した例²⁾など名前の記載もない人たちの浄財を得ていることがわかる。地域は北は出羽国から南は琉球国まで広い範囲に及んでいる。

二 刊記についての研究史

赤松晋明師はその重要性に気づき昭和三十一年（一九五六）その刊記部分の丁だけを版木から刷り『黄檗版大藏經刊記集』と題し、一帙八冊にして出版した。その後、昭和三十九年（一九六四）、京都大蔵会五十周年記念出版の折にまとめられた『大藏經一成立と変遷一』では³⁾、

先年赤松晋明師が全蔵の板木から採集した『鉄眼禪師版黄檗大藏經刊記集』一帙は、刻蔵募縁の実態を知る貴重な資料である。

と、指摘している。また、大正大学の石上善応氏は「増上寺三大藏經の位置とその価値」と題する中村元・金山正好両氏の対談で司会をされているが、そこで、金山氏が三大蔵の目録作成に際し刻工者・刊記・校記・昔積など藏經成立に関す

る詳細を採録した、という発言を承けて、つぎのように云っておられる。

こういうことは、一般の人たちにはどうということのない問題でしょうが、ある意味で非常に大切なことだと思いますね。文化史的な意味から、重要なことだという気がしてならないんです。こういう目録が刊行されれば、すぐということだけでなく、藏經研究以外のいろいろな分野の人たちに、使われていくだろうと思います。そういう意味で、私はこの目録に期待しているわけです。中村先生、これは別の発想ですが……。例えば黄檗版ですね。あれには各巻の終わりのところに、全国を歩いて、どこの国の誰からどれだけの喜捨を受けたということが書いてあるんですね。これを読むと、あの黄檗版を作る時の経済状態がわかるんです。当時は、金（きん）の一枚ケラといっても、都（みやこ）と田舎とではその価値が違いますから、計算のしかたはむずかしいと思います。しかし、実際に、どこの国の誰からいくら寄付を受けたかは分かるわけです。最初の般若經のあたりなどは、ほとんど九州一円です。これが、今度は都の場合、富永仲基じゃないですが、それこそいろいろな関連がそこに出てくると思うんです。ですから、私は、黄檗版の研究だけでも、大変な価値があると思っています⁹⁾。

このようにその研究の重要性は諸氏に認められながらも、研究は平成二年度に文政期の刷本をもとになされた上越教育大学松野純孝氏を代表とする報告だけである。これは文部省研究助成『研究成果報告書黄檗鉄眼版一切經の仏教史的研究』の一部としてまとめられたものである。

三 刊記の数について

鉄眼の大藏經には、底本とした『万暦版』正藏には入蔵されていないものや浄厳の要請による典籍の出版があり、改版・改刻も行なわれていたことが判っている⁵⁾。その上で検討してみると、元禄期の刷本である獅谷法然院の『黄檗版大藏經』の刊記には、赤松氏にない刊記がかなりある。また延宝六年（一六七八）御水尾天皇に献上されたと伝えられる正明寺所蔵の刊記は少ない数となっている。文政期の刷本である上越教育大学所蔵本を含めこれらの刊記数を比較すると、

延宝六年（滋賀県日野正明寺蔵本）	一〇二三
元禄期（獅谷法然院所蔵本）	一三二〇
文政期（上越教育大学所蔵本）	一二七八
昭和期（赤松氏『刊記集』）	一二五七

となる。これらの刊記を集めて重複を整理してみると、刊記は一四二三件となった。

四 なぜ刊記の数が違うのか

最初に刷られた正明寺所蔵本が一番少なく、法然院所蔵本が一番多い。『大般若經』六百巻を例にとれば、全刊記四五一件のうち正明寺本は四〇〇件、法然院本は四五〇件である。正明寺本にない五一件の刊記年月は延宝六年九月から七年六月までのものであるから、延宝六年七月に後水尾天皇に献上された正明寺本『黄檗版大藏經』にはないのが当然であると考えられる。その一方、正明寺本には『光讚般若波羅蜜經』をはじめ寛文年間の刊記を持つものが二七二件、延宝五年まで下ると三一三件のあるべきはず刊記がない。また、逆に正明寺本には献上されてから後の本来ないはずの延宝八年六月の刊記を持つ『秘密相經』『大悲空智金剛大教王儀軌經』『幻化網大瑜伽教十忿怒明王大明觀想儀軌經』の刊記をはじめ延宝七年にも十件の刊記がある。このことは刊記に記載されている年月が刻まれた年月と必ずしも一致しないことを意味している。

法然院本と上越大本との数の差は蔵外經典の有無による。『演義鈔』の版木は正明寺本、法然院本ともにすでに出版されていた和刻本をつかい、鉄眼の刊記のみを巻末に付け加えていたが、後述するように享保の頃までには『万曆版』を底本に新たに版木が刻まれ、それに伴い初版の刊記は使われなかったからである。

上越本と赤松氏『刊記集』の差、二一件については見落としであろう。と推定される。蔵外の典籍について版木調査したものには鉄眼の刊記があったことを指摘しておく。

以上、理由をまとめてみると次のようになる。

〔Ⅰ〕はじめは和刻本を底本として使い、そこに鉄眼の刊記を付けていたのを、後刷りの刷本では『万曆版』の和刻本にかえられ、それにともない、鉄眼の刊記も削除されているものがある。例として、『大方広華嚴經疏演義鈔』のように鉄眼当時には元が浙江省昭慶律寺蔵板で、それが和刻出版され、さらにその版木に鉄眼の刊記を付けていたのを、後刷りの刷本では『万曆版』を覆刻した和刻本にかえられ、鉄眼の刊記も削除されている。

〔Ⅱ〕鉄眼は『万曆版』正蔵には蔵外の典籍にも刊記を付けていることが挙げられる。例としては、『楞伽經阿跋多羅宝經參訂疏』・『大方広新華嚴經合論』・『妙法蓮華經綸貫』『妙法蓮華經台宗會議』などの刊記である。

〔Ⅲ〕刊記だけを後から補刻した例として、『涅槃經疏』などがあげられる。

〔Ⅳ〕『刊記集』の見落としと思われる。

五 改刻の時期

では、その改刻の時期はいつなのかということが問題になる。私は『大方広仏華嚴經疏演義鈔』も『涅槃經疏』も、鉄眼とともに大藏經出版に尽力した宝洲の頃と考えている。つまり鉄眼が亡くなってほど経たない頃である。。

滋賀県五箇荘黄檗宗小松寺に伝わる『黄檗版大藏經』には各冊の末丁に識語があって、墨書のものは貞享四年、多数を占める印刷のものには次のようにある。

印房、大藏經を製造し、摂（津）の瑞龍・金禅、（和）泉の宝泉、（近）江の小松・延命、武（蔵）の海蔵・羅漢、肥（後）の三宝に寄せ鎮め以て千秋の法宝となす。八寺は乃先師鉄眼光和尚の手關に係ればなり。凡そ其の寺に在て經庫を蒸潤する者は涼曝し、残断する者は粘綴し、煙塵の為に染められず、蠱鼠の為に損せられず、縦ひ一卷半帙なりとも簿を照して出納し、常に鎖鑰を厳にして散失を致すこと無んは、庶くは先師募刻の心老僧成懺の力を虚しくせず其の主為る者も更に須く意を留むべし。

享保三年戊戌年九月吉旦

前住瑞龍第二代七十五歳翁興福聡宝洲手書して、近江州建部郡平坂県箕山小松禅寺の
主僧暨蔵鑰を司る者に次げ知らしむ
(原漢文)

小松寺は鉄眼の開山で藏經出版の後継者でもある二代宝洲が自ら享保三年九月に納めたことを記している。

ところで、黄檗宗宝蔵院には『黄檗版大藏經』の納入台帳である『全蔵漸請千字文朱点簿』があって、第一冊には小松寺がつぎのように記載されている。

江州小松寺へ渡す御經 子五月二九日

此印 百卷 子五月二九日渡了

丑三月十一日渡 此印二百卷

寅の七月二日 此印二百卷

享保三年戊午年一二月一四日 千三百九拾卷 五拾九帙 とんす帙

庚子九月十八日渡 目錄壹帙

辛丑十月二三日 千三百八十卷 五十二

享保九甲辰十二月二日千四百卷 四拾八帙

享保十三戊申七月八日千四百卷 五拾九帙

享保二十乙卯十月十日八百五十卷 三拾六帙

江州小松寺全蔵済了 乙卯十月十日

この資料より、正確には九回にわけて分納され、享保二十年十月十日（一七三五）に納入が完了したことがわかる。

この小松寺蔵本を調べてみると、改刻の典籍について文政期ころの刷り本と同じ版であることがわかった。このことから、改刻の時期は享保以前であり、延宝六年（一六七八）の正明寺におさめられた初刷り本から僅か五十年ほどしか経過していないことが判る。鉄眼とともに黄檗版大藏經の刊行に尽力した宝洲が元禄十三年（一七〇〇）に残した『宝蔵院規約』のはじめには⁶⁾。

受業先師眼老和尚願輪に乘し来て募つて蔵版を刻む。天下後世、普く其の賜を承く。化をおさむる後は余、其の事を司とり其の志を継いで其の未だ満たざる所を満て其の未だ了らざる所を了ふ。精を研き思ひを覃して流伝すること年久し。

と述べ、鉄眼の遺志を継いで蔵經の一応の完了したことを表明している。そして第二条では次のように記している。

本院、印房を京上に立てて蔵經の事を弁ず。其の執事の如き当に己れを守って廉謹なる者二人を択んで之れを司とらしめよ。請蔵銀毎年七月臘月二時に結算せよ。もし余財有らば当に続蔵を開刻し、欠版を修補し、院字を整葺するの費にすべし。私しに分毫をも得ざれ。

注目すべきは、余財がでたならば、堂舎の整備よりも欠版の修補よりも、まずさきに続蔵の開刻を挙げている点である。

そこでもう一度いつ改刻が行なわれたのか、という問題点を考えると、元禄十三年より享保元年（一七一六）までは僅か一六年であるから『宝蔵院規約』にいう「余、其の事を司とり其の志を継いで其の未だ満たざる所を満て其の未だ了らざる所を了ふ。」というものは『大方広仏華嚴經疏演義鈔』や『涅槃經疏』の改刻と理解できよう。

よって、鉄眼募刻の刊記には年月の記載や改版の問題が有るにしても、一四二三件の刊記には鉄眼とその遺志を汲んだ弟子宝洲による募縁活動によるものと確認できた。

六 刊行年による整理

最後にそれらの情報を刊行年月に限って記載のとおり整理すると、刊行年を記していないものは一七件である。月別に一四〇六件の刊記を表にするとつぎのようになる。(表1) この中には、春夏秋冬の季節だけで、具体的に月を表していないものがあるが、それらは二、五、八、十一月に置き換えた。これから指摘できることは、最初の刊記は寛文十一年（一六七一）一月六二件のうち、万暦版正蔵には蔵外の『大方広仏新華嚴經合論』が六〇件を占めている。そしてその翌々月

(表1)

年 月	1671	1672	1673	1674	1675	1676	1677	1678	1679	1680	1681	合計
1	62	3	0	0	1	0	0	0	10	0	0	76
2	31	2	210	0	0	0	120	0	0	0	2	365
3	33	1	82	0	1	0	0	0	1	0	0	118
4	28	10	0	0	0	0	108	0	23	0	0	169
5	6	68	9	0	0	3	89	0	136	0	0	311
6	10	0	1	0	0	0	86	0	5	3	0	105
7	30	1	1	3	0	0	6	0	0	0	0	41
8	18	0	2	0	0	17	0	0	0	0	0	37
9	4	37	0	0	0	0	0	3	0	0	0	44
10	1	35	0	0	0	0	0	2	0	0	0	38
11	0	45	4	0	0	0	0	2	0	0	17	68
12	0	17	0	1	11	0	3	2	0	0	0	34
	223	219	309	4	13	20	412	9	175	3	19	1406

の三月までには全一二〇巻が出版されている。また、同じく蔵外の『楞伽經阿跋多羅宝經参訂疏』も同年八月に出版されている。また、最終年の刊記は天和元年で、一七件二部の出版であるが、これも『妙法蓮華經綸貫』と『妙法蓮華經台宗会義』で、十一月に刊行されている。鉄眼は翌年三月に入寂しているから他にも入蔵予定典籍は有ったと考えられる。少なくとも刊記の上から『鉄眼版大蔵経』を論ずると『万暦版』正蔵の出版の前後に、蔵外典籍の刊行が行われていることに注目したい。

以上、鉄眼募縁にかかわる刊記の数を一四二三件と確定し、資料的価値を論じた。

- 1) 『大宝積経』目録刊記ほか
- 2) 『大般若経』四百三巻刊記
- 3) 一〇一頁
- 4) 『増上寺資料編纂所所報』四号昭和五五年十月
- 5) 拙稿「『獅谷法然院所蔵麗蔵対校黄檗版大蔵経並新続入蔵経目録』解題」(平成元年刊 同目録, 仏教大学仏教文化研究所)及び「『黄檗版大蔵経』の再評価」(平成三年刊, 『仏教史学研究』三四巻二号)参照。
- 6) 宝蔵院所蔵

※ 刊記については『影印黄檗版大蔵経刊記集』(平成六年三月思文閣出版刊行予定)を参照していただきたい。

〈キーワード〉 黄檗版, 銀眼, 大蔵経

(佛教大学専任講師)